幼馴染がキャンプを始めるらしい。

らぎらぎのひーらぎ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無口な高身長女子が、なでしこやリン、幼馴染たちの輪に入る話。

目次

一話 …… 1
二話 …… 6
三話 …… 10
四話 …… 13
五話 …… 18
六話 …… 23
七話 …… 30

一話

「…シーズンオフ、最高」

ほとんど貸し切り状態のキャンプ場を眺めて、つい呟いてしまった。

本栖湖にある、私のお気に入りのキャンプ場に、必死に自転車を漕いでやってきた。晴れていれば富士山を望むことができるのだが、今日は曇っていて見えなさそうだ。

道中、トイレの近くで寝ている少女を見かけ、彼女は大丈夫なのだろうかと思ったが、放っておいた。こんなに寒ければいつか目覚めて帰るだろう。

テントを張って、ブランケットを被る。カイロを持ってきたため面倒な焚き火はいいや…と思ったが、予想以上に寒い。

しょうがないので、焚き火を用意することにした。

薪を拾って戻ってくると、大きな荷物を背負った人が歩いていた。私と私のテントを見ると、そのまま少し遠くの場所まで歩き、荷物を置いた。

私と同じソロキャンパーだろう。黒いニット帽とマフラーを口元まで巻いた高身長の男性だ。

そしてバッグから取り出したテントは…やけに大きく、思わず「でか」と漏れてしまった。家族用のものだろうか。恐らく車で来たのだろう。

やけに気になって彼をを眺めるも、とても組み立てに苦戦している。友人が後から来る様子もない。

「あの…て、手伝いましょうか…？」

痺れを切らして、つい声をかけてしまった。知らない男性に話しかけるというのは、なかなか勇気がいる。しかし、このままでは彼は凍えながら一夜を過ごす羽目になってしまい、死んでしまうだろう。

「……助かります」

ぼそっと、一礼をしてからそう返してくれた。もっと低い声を想像

していたのだが、私の想像よりは高かった。
そして、どう考えても一人で組み立てるものではない大きなテントを組み立て終わった。やけに疲れて、少し汗をかいてきた。
「はぁ、疲れた…」
「……すみません」
「あ、いやっ、自分が勝手に手伝っただけなんで。…その、誰かお友達とかは…？」
もし私がいなかったら組み立てることもままならなかったであろうテントを眺めながら言う。
「…初めてで。家にあったテントを…持ってきただけです」
視線を逸らして、ばつの悪そうな顔をしながらそう言った。ベテランさんかと思ったら…まさかのキャンプデビューだった。なんか、少し気が抜けた。
「本当に…ありがとうございました」
「い、いえ、私はあそこにいるので。何かあったら…その、なんでも聞いてください」
なんか、絆されてしまった。私も初心者だった頃は火もまともに点けれなかったものだ。だからこそ、少し先輩面したかったのかもしれない。
自分のテントの前に戻り、座って本を開く。
あのテント…一人じゃ絶対立てれないけど、なんか…負けた気分だ。

「ふぅ…さむさむ」
夕食のスープを飲みすぎたか、尿意を催しトイレへ向かう。なかなか薄暗い道で、少し不気味だ。
「……ん？」

トイレの前に高身長と低身長の二人の人影が見える。何か喋っているようだ。あれはさっきのお兄さんと…
「…あの、どうかしました？」
「……」
困ったように、顔を顰めている。もう一人は…あ、こいつまだいたのか。トイレの近くで眠っていた無謀な奴だ。
「たすけてくださいいいっ…！」
「……え、ええ…？」
とりあえず、私のキャンプ地に連れて行った。

「自転車で富士山を見に来て、そのまま寝過ごしたと」
ぐずりながら頷く女の子。この寒さの中でよく眠れたものだ。…頑丈すぎだろ。
「別に、一直線で帰れると思うけど」
「むりむりむりっ！　ちょーこわいっ！」
ここまで来るには山道を一直線だが、道中には冷たい風が吹き抜ける真っ暗なトンネルがある。まぁ…確かに、夜のトンネルを一人で帰るのは私も怖い。
「家に連絡して迎えに来てもらうのは？」
「はっ、そうだっ！　スマホスマホっ、スマホスマホ……すまほ？」
そう言って懐から取り出したのは、カジュアルなトランプケース。いや、サイズ感だけだよ。
「…はぁ。私の電話貸したげるから、番号は？」
「引っ越したばかりでわかりませんっ！」
もう清々しいほどに胸を張って答えた。
不意に、ぐぅぅぅ……と、女の子の腹の虫が、静かなキャンプ場に鳴り響いた。
「……ラーメン、食べる？」
カレー麺を振る舞うことになった。

「うま、うまぁ…！」
　目の前に出されたカレー麺を、本当に美味しそうにもぐもぐと食べる。これでそこまで感動されると少し困るが、まぁ寒空の下で食べるご飯は格別だからな。よくわかる。
「ねぇ、あなた。どこからきたの」
「あたし？　あたしは南部町ってとこ」
　遠いな、よく自転車でここまでチャリで来たよ。意外と体力あるのな。
「もとすこの富士山は千円札の絵になってる！　って聞いたから頑張ってきたのに、曇ってて全然見えないんだもんっ！」
　ぷんぷんと膨れる女の子。…ん？　あれ、湖の雲が…
「見えないって、あれが？」
「え？　……あ、ふじさん…」
　いつの間にかすっかり晴れて、月明かりに照らされる富士山の姿が私たちの目に入る。やっぱ、ここはこれが見えるのが良いな。

「……どうも」
「あ、どうも」
　お兄さんが静かにやってきた。気配が無さすぎる上に真っ黒の服装だから全然気づかなかった。手にはカップが二つ。
「お礼と…差し入れ、です」
　コト、と私たちの前にカップを置いた。湯気が立っていて…甘い香りが鼻をつく。
「こ、ココアだぁ。いいんですかっ!?」
　コクリと、無言で頷いた。少し無口で怖い人だが、意外と優しいんだな。そしてまたぺこりと一礼をして、自分のテントに帰っていった。
　…うん、甘くて美味しい。

「あ、お姉ちゃんの電話番号しってた…あたし」
温かいココアでほっと一息ついている時に、女の子がそう呟いた。
初対面ながら、どこか抜けているなぁ、この子は。
私は携帯を貸した。

「あのお兄さんかっこいいねぇ。ベテランさんかなー？」
……初キャンプで頓挫しそうになっていたことは黙っておこう。
でも……なんかどっかで見たことあるような…？

二話

「…誰もいない」
部室棟へと走り、野外活動サークルの扉を開いた…んだけど、とっても狭い。主に横幅が。うなぎの寝床かな？
中に入ると、余計に狭さが気になる。…壁の圧力がすごい。
棚のようになっている場所には、薪や松ぼっくり。なぜか大量のツナ缶が入っていた。中を物色していると、がらがらと扉が開いた。
「……」
わたしをじーっと見つめる女の子がいた。
「え、えっと、わたしはっ……」

「なんだ、空き巣じゃないんか」
座布団を敷いて座るメガネの女の子と、棚の上に座るサイドテールの女の子が私を見る。サークルに入るため、入部動機などをとりあえず伝える。
「なるほど…本栖湖で行き倒れていたところ、謎のキャンプ少女とカッコいいお兄さんに助けられたと」
「はい!!!」
「あーでもウチ、部員募集してないんだよね」
「えっ!?」
そ、そんなぁ…私のまったりアウトドア計画が…登山部は嫌だし…うぅ…
沈んでいると、二人がコソコソ話をしていた。そして、メガネの子が私の肩を掴んで、真っ直ぐ目を見つめて言った。
「君のような逸材を待っていたのだよ」
後ろの子は少し呆れていたが、私は浮かれて気付かなかった。
「私、各務原なでしこっ！　よろしくねー！」

「私は犬山あおい、こっちのが大垣千明や。よろしゅうなぁ」
やった…私のアウトドアデビューの第一歩だ！
「野クルへようこそー！」
「わーい」
野クル…良いね！　私は野クルの一員だぁー！
「あだっ」
「ヴっ…」
あおいちゃんと千明ちゃんが狭い部屋内ではしゃいだせいで、腕や足がぶつかり合う。あきちゃんは鳩尾に足が入ったようで、すごく痛そうだ。
「ふ…ふふ、なぁに、こんな狭い部室とはもうおさらばだ…！　それに、我々の活動場所は外だからなっ！」
千明ちゃんがバッグから体操服を取り出し、ジャージに着替え始めたため、私も着替えることにした。

「ねぇ、普段はどんなことしてるの？」
「校内の落ち葉とか枝で焚き火してコーヒー沸かしとるよ」
校庭の並木の下を見ても、落ち葉などはなく冷たい風が吹き抜けるばかりだ。
「落ち葉…ないよ？」
「昨日やったからな。……ふ、ふふふ…待っていろっ！　とっておきのものを持ってきてやるっ！」
千明ちゃんは部室へと走り去った。あおいちゃんをチラリと見るも、さぁ、と首を傾げるばかりであった。
「ねぇ、あおいちゃん。そういえばさっき、狭い部室とはおさらばだーって千明ちゃんが言ってたけど、そうなの？」
「あぁ、それ？　今は野外活動サークル、略して野クルやけど、四人以上になったら部として認められるんよ。そうなったら部室が貰えるかもしれんよって話や」
四人…私と、あおいちゃんと、千明ちゃん……あれ、後一人は？
指を折りながら数えるも、やはり3人だ。

「あぁ、もう一人の子は今日はおらんのよ。ほら、あっちの…」
「おーいっ！　もってきたぞぉっ！」
　あおいちゃんが運動部のいるグラウンドを指差した瞬間、千明ちゃんが何かを抱えて戻ってきた。
「道具は使ってなんぼだからなっ…本物のテントだぞっ！」
「て、テントっ！」
　私の意識は、完全にテントに釘付けになった。やはり、アウトドアと言ったらテント。テントがなければキャンプはできない。
「それ、夏休みにキャンプしようと注文したら、9月に届いた激安テントやないの」
「げ、げきやす…」
「…しょ、しょうがないだろぉ!?　他のやつは3万とか4万とか、学生の財布をなんだと思ってるんだよぉ!!」
　さ…さんまんえん…！　そ、それは買えないや…。キャンプって、お金かかるんだねぇ…
　テントを立てるべく、中庭へと向かった。キャンプ気分を味わうため、がんばろう。

「助けに行かなくていーの？」
「……いいよ、別に」
　あいつ…ここの生徒だったのか。
　本栖湖で出会った逞しい少女が、まさか同じ学校の生徒だったとは。見つかったら面倒なことになりそうだ。
　なでしこ…だったか。別れ際に渡された電話番号の紙の下に名前が書いてあったのを思い出す。電話帳の登録もその名前だ。
　確か野外活動サークルの奴らと一緒にテントを立てて遊んでいる。そこで、ポールがばきっと無慈悲にも折れた。
「あれってもう買い替えなの？」

「ん…まぁ、メーカーに送って修理かな。あとは、小さいパイプみたいなのがあれば修理できなくはない」
「それって、こういうの？」
私の友人…というか、腐れ縁の斉藤が、なぜかピンポイントに私が言ったものを取り出した。いや、ご都合主義かよ。
「…じゃ、私が行ってくるねー」
私の行きたくないオーラを察したのか、パイプを持って外へいく斉藤。

外でワイワイと賑わう斉藤たち。…何か嫌な気がする。
そしてその予感は的中し、斉藤が私を指差した。何と言っているかはわからないが、大体は見当がつく。なでしこ、にも見つかった。
そしておそらく、私がいる図書室へと走り出したであろうなでしこ。
こうなりそうだったから嫌だったんだよな…

…そういえば、あの時会ったお兄さん。なんだろう、どこかであったような気がしていたが、さっきのなでしこを見たらよりその考えが強くなってきた。
まさかこの学校…はないか、流石に。大学生ぐらいかな。

三話

「…あ、そうだ！　聞いてよリンちゃん！」
「なんだよ、やっぱ手伝うか」
　富士山の近くの、麓キャンプ場でゆっくりと時間を過ごしていたところ、斉藤の差し金によりなでしこが襲撃してきた。大量の食材と土鍋を持参してきて、夕飯を振舞ってくれるとのこと。
　その準備の最中、なでしこがいきなり声を上げた。なんだろう、また野クルへの誘いじゃないだろうな。
「会ったの！　お兄さんと！」
「…へぇ、なでしこ、お姉さんだけじゃなくてお兄さんもいるんだ」
　だからどうした、と言いかけたが、とても楽しそうだったので雑に扱うのはやめた。それでも、別になでしこの家族関係をビッグニュースみたいに聞かされてもな。
「ちがうよー！　あの、本栖湖でキャンプしてたお兄さん！」
　あぁ、そっちか。やっぱ意外と近くに住んでたのかな。見覚えがあるのも、町のどこかで出会ったのだろうか。
「南部町のあたりをランニングしてたんだよ。声かけたらね、止まってくれたの。連絡先も交換したんだー！」
「いや、ランニングの邪魔してやんなよ」
　走ってそこそこ疲れているところに、この元気っ子のなでしこの相手はなかなか辛いだろう。
「あ…そうだったね。謝っておこ」
　なでしこはスマホを取り出して文字を打ち始めた。
　…少し気になる。スマホを覗き込むと、メッセージアプリでやり取りをしていた。
『この前はいきなり声かけちゃってごめんなさい!!』
　名前は、海津友希…かいづともき、かな？
「た、大変だよリンちゃん…既読付いたけど返事こないよぉ…」

確かに気難しそうだったし、なでしことは相性悪いかもしれないな。
「…まぁ、落ち着けって」
別にココア貰っただけの関係なんだから、そんなに悲観しなくてもいいんじゃないかと思ったが、その純粋さもこいつの良いところなのだろう。人懐っこいのは結構だが、悪い男に騙されそうな感じがするから気をつけてほしいな。

「よーく聞け、お前ら。我々、野外活動サークルはようやく部として認められることになるだろう。それを記念して、本格的に『冬キャン』の準備に取り掛かる」
息が白くなるような寒さの中、野クルで焚き火を囲み、あきちゃんが腕を組みながら私とあおいちゃんに演説するように喋る。やっと、キャンプができる！　…あれ、サークルから部になるんだ。
「野クルじゃなくなっちゃうの？　あきちゃん」
「まぁ、そうだな。これで広い部室をゲットだ！」
あきちゃんはグッとサムズアップをする。私が入ったからサークルじゃ無くなるのかな。　…でも、野クルじゃなくなるってことは何になるんだろう。野ブ…なんか語呂悪いなぁ。
「ほら、前に言ったやろー？　部員が四人になると、部として認められるんよ」
不思議そうな顔をする私に、あおいちゃんが教えてくれた。そういえば…初めて野クルに行った日にそんな話をしていた気がする。
「そーだったね。もう一人の子ってだれなの？」
野クルに入ってからしばらく経つが、あおいちゃんとあきちゃん以外は見たことが無い。
「あー、そーいやー言ってなかったなぁ」

「幽霊部員なんよ。ユキちゃん言うんやけどな？　私とあきが幼馴染ゆうんは言ったことあるやろ？　その子もなんよ」
へぇ、ユキちゃんかぁ。でも、なんで来ないんだろう。二人の喋り方的に結構仲が良さそうなのに。
「あいつ、陸上部と兼部してんだよ。だからあんまりこっちに来てくれないんだよ」
「まぁ、名前貸してくれてるんよ。結構凄い子でな？　全国大会とか出る子やから、忙しいみたいや」
「そうなんだ…凄い子なんだね！」
まだ見たこともない『ユキちゃん』を褒めると、二人は自分のことのように嬉しがる。本当に仲がいいんだなぁ。会ってみたいなぁ、ユキちゃんに。
ユキちゃんは陸上が大好きなのだろう。全国大会…凄い頑張ってるから、野クルにこれないんだろう。
「いつか合わせてやるよ。多分呼んだらきてくれんだろ」
「今回の冬キャンにも私から誘ってみるわ」
どんな子なんだろうなぁ、ユキちゃん。二人と仲良しなら、私も仲良くなれるかな…

四話

『表彰状、授与』

全校集会とかいうクッソ退屈な時間。とっとと図書室行きてぇ…と言う気持ちを抑えながら、体操座りを続ける。朝にやるならともかく、放課後にやんなよ。

それに、表彰って言っても、知らん奴が貰っていても別に何の感傷も湧かないからな。この後に校長のどうでも良い話もあると考えると最悪だ。

『表彰、陸上部一年。海津友希(ユキ)』

「はい」

まぁ、知ってる奴で表彰されそうな奴はいないが。壇上に上がる女子生徒を見て……え、え？

身長順の列の先頭だから、壇上は上がる人物の顔がとても良く見える。見れば見るほど、重なっていく。あの日…なでしこと出会った日、私の隣でキャンプをしていた初心者キャンパーと、壇上に上がる人物が。

しかし、一点だけおかしいところがある。だって、今賞状を受け取っているあの人物は……

制服でスカートを履いているのだから。

さっき読み上げられていた名前が、海津『ユキ』。なでしこの携帯に登録されていた名前が、『海津友希』。……つまり、友希は『ユキ』と読むのであって、『トモキ』ではなかったのだ。そうか…女子、だったのか。

それに、同い年なのか。私との身長差…おかしいだろ。

賞状を受け取って、私たちに向き直る『海津友希』。ベリーショートの髪に、しなやかな足…スタイルが良すぎる。こんな同い年がいてたまるかと言いたい。

「あっ!!」

隣の方で、いきなり声を上げた奴がいた。この声は…やっぱり、なでしこが気づいて、驚いたのだろう。周囲の生徒の視線がみるみる集

まっていき、口を自分の手で必死に塞いでいた。
そして、海津さんも、なでしこを見ている気がした。
どこかで見たことがあるのは…同じ学校だったからなのか。

「かっこいいよねー。海津さん」
「…いきなりどうしたんだよ」
集会が終わり、図書委員として座っているところに、いつも通り斉藤がちょっかいを出してくる。
「んー、海津さんのこと、気になってたんじゃ無いの？」
「その言い方やめろ、恋してるみたいだろ。…あと、人の思考を読むな」
なんでこいつは口に出していない私の考えていることをピンポイントに当ててくるのだろうか。それに、気になる人とかいう誤解を生みそうな発言はやめてほしいものだ。
「…てゆーか、あの人のこと知ってんのかよ」
「えー？　結構有名だよー。背も高くてスタイルいいし、足もすっごく早いんだよ。結構口数が少ないから、ミステリアスだよねー」
あと、同じクラスだし、と続けた斎藤。まぁ…確かに、男子だったらとてもモテそうだ。でも、あの時のキャンプ場で見た、焦った表情はかなりレアなのでは無いか。
「ほら、あそこに…」
そう言って、斉藤は窓の外を指差した。そこは中庭なのだが、海津さんが、なでしこと一緒にいた。
「…あいつ、嫌われてたっぽいけど大丈夫か…？」
なでしこは既読スルーを受けていたのを知っているので、少し不安になった。そして、なでしこが少し震えながら俯いている。……あぁ、全く！
なぜか、足が中庭へと進んでいた。図書委員の仕事をすっぽかして。

びっくりしちゃったよ。あのココアをくれたお兄さんが同じ学校で、同い年で、お姉さんだったなんて。いや、お姉さんではないのかな、同い年だし。
それに、トモキさんだと思ってたらユキさんだったなんて…。あ、あれ…ユキ…ユキちゃん？　しかも陸上部で表彰も受けてて…もしかしてあきちゃんたちの幼馴染って、あのお兄…お姉さんだったんだ！
「…あの」
「え…あ、な、なんでしょうかっ！」
声をかけられたから後ろを振り向くと、そこにはユキさんがいた。
…そういえば、ランニングを邪魔しちゃって、怒ってるんじゃ…
「…ついてきて」
「は、はいっ！」
こ…こわいよぉっ…！

ユキさんの背中についていき、中庭へと連れてこられた。そして、周りを気にするように辺りを見回してから、私に話しかける。
「あの…」
「ご、ごめんなさいっ！」
とりあえず謝らなければと思い、すぐに頭を下げる。ゆ、ゆるしてもらえるかな…
「…？　なんで…謝ってる？」
恐る恐る顔を上げると、ユキさんの困ったような表情が目に入る。
…怒って…ないのかな。
「え、あの…ランニングの邪魔しちゃって…」

「…別に、気にしてない」
　無表情だけど、怒ってないって言うことは伝わってきた。よ、よかったぁ…きっと既読をつけてから返信するのを忘れてただけなのかな。それよりも、なんで私は呼ばれたんだろう。
「…野外活動サークル、入ってる？」
「あ、はいっ！　新入部員ですっ。その、えっと…海津…さんはあきちゃん達の幼馴染なんですか？」
「…知ってたんだ。その…お願いがある」
　やっぱりそうだったんだ。でも、お願いってなんだろう。
「…私と、キャンプ場で会ったことは…秘密にしてほしい。千明とあおいには」
「は、はい。わかりました」
　うーん、あおいちゃん達に教えてあげようと思ったのに。あの時の謎のお兄さんの正体は、幻の幽霊部員だったーって。でも…なんでだろう。
「…ありがと。…さようなら、各務原さん」
「は、はいっ！」
　同い年なんだけど、つい敬語を使っちゃう。やっぱり、大人びてる感じがすごいなぁ。背が高いからかな。お姉ちゃんも結構高い方だと思ったけど、それ以上だよね。

「お、おいなでしこ」
「あれ、リンちゃん？」
　リンちゃんが少し焦ったような顔をしながらやってきた。そういえばここは図書室からは丸見えだった。
「な、なんか酷いことされなかったか！」
「酷いこと？　何もなかったよー」
「そ、そうか…その、何してたんだ？　海津さんと」
　最初はちょっと怖くてびくびくしてたから、心配して見に来てくれたのかな、リンちゃん。
「うーん、ちょっとお願いされただけだよ」

なぜ幼馴染であるはずの二人に隠さなければならないのか、どれだけ首を傾げても、答えは出てこない。でも、約束は守らなきゃいけないから、あおいちゃん達には秘密にしておこう。

「夏用シュラフはやっぱきついかもなぁ。…あ、ユキだ」
「がんばってなぁユキー。あ、なでしこちゃん、あの子がうちらの幽霊部員や。今日表彰されとったやろー？」
「うん！　さっきお話しして……てるところを見たよっ！」
「なんだその日本語。…あいつ、誰と話してたんだろなあ」
「ユキにも友達ぐらいおるやろ」
あ、あぶないっ…早速約束を破るところだったよぉ…

五話

「あったかいなぁ。癒されるわぁ」
「景色もすっごく良いねぇ」
　今は、野クル初のキャンプ、冬キャンのキャンプ場の道中の温泉にまったり浸かっている。いやぁーほかほかになっちゃうよぉ…
「いやーユキも来ればよかったのになぁー。こんな温泉に入らないなんて勿体無いぜぇ」
「まぁまぁ、ユキも忙しいんやろ。今日も走り込んどるんとちゃう」
「あっはっは、陸上お化けだからなぁーあいつ」
　結局、ユキさんは冬キャンには参加しなかった。私も、一応それとなく誘って見た。帰ってきたメッセージは、『ごめん』だった。

「いやー食った食ったぁ…美味かったぁ」
「ごちそうさまやなぁ。カレー美味しかったで、なでしこちゃん」
　イーストウッドキャンプ場について、焚き火からのキャンプ飯…
うーんっ！これぞキャンプっ！
「いやぁー勿体無いなぁユキのやつ。こーんなうまい飯をくいそこねるなんてよぉ」
「ま、キャンプだから美味しく感じ取るってところはあると思うけどな？」
　…二人とも、ちょっと寂しそう。楽しんでるのは本当なんだけど、少し物足りなそうだ。それに、口を開くとユキさんのことばかり。

「ね、ねぇっ！　あおいちゃんっ、あきちゃんっ！」
「おー？　どーしたんだよなでしこぉ」
「その、ユキさんのことっ、私に教えてっ！」
　二人がこんなに大好きなユキさんは、どんな人なのだろうか。私は

ちょっと喋っただけで、全然知らない。だから…聞いてみたい。
「ええよ？　ってゆうても、あきの方が詳しいけどなー」
「ふっ…まぁあたしは小学生からの付き合いだからな。あいつな、こーんな小さかったんだぜ？　私の後ろをぴょこぴょこ付いてきてなぁ…。妹みたいな奴だったよ。なのになっ！　あいつ高学年からぐんぐん背ぇ伸ばしやがってよぉ」
今はあんなにおっきくてクールなユキさんだけど、昔はやっぱり可愛かったんだなぁ。
そして、あきちゃんはスマホの画面を私に向ける。写っているのは…ちっちゃいあきちゃんと、多分ユキさんだ。
「へぇ、これは初めてみたわ。かわええなぁ」
腰に手を当てて、写真のど真ん中にいるあきちゃんの後ろに隠れるように立つ女の子。これがユキさんだろう。
「で、これが高学年の写真な」
二人で並んで写っている写真。さっきのとは違い、二人の頭と頭では激しい段差がある。もちろん、ユキさんの方が大きい。満面の笑みを浮かべるあきちゃんと、ぎこちない笑顔なユキさん。
「ちーちゃん、ちーちゃんって呼んできてな？　可愛い奴だよ。あたしの身長を越したあたりから無口になってきたけどな」
昔からクールってわけじゃないんだねぇ。私も昔は…ちょっとまんまるだったけど。
「私とあきが会ったんわ中2のころやけどな、ユキとは一年の時におんなじクラスやったんよ。その時は喋ったことは無かったけどなぁ。陸上部のエースやーって騒がれとったんよ」
「あたしがユキと幼馴染って言ったらめっちゃ驚いてたもんなぁ」
その時には、今のユキさんになってたんだね。
「…最近は喋ってねぇなぁ、そういえば」
「せやなー。無理言って野クルに入ってもらったから、うちらもちょっとばつが悪いわ。アウトドアもあんまり興味ない言っとったし」
うーん、興味ないのにソロキャンなんて行くかなぁ。それに、秘密

にしておくのもよくわかんない。ユキさんもリンちゃんと一緒で、ソロキャンが良いっていう感じなのかな。
…それもちょっと違う気がする。
やっぱり、ユキさんとはちゃんと話したいなぁ。

放課後、図書室に委員として座っていた。そろそろ閉めなきゃな。
でも、寒い外には出たくないと思う気持ちが強くなり、すっかり尻に根が張ってしまった。
「…お土産も…渡さなきゃな」
なでしこ用に買ってきた長野土産のお菓子は、まだバッグに入っている。どこかで会うと思ったのだが、機会に恵まれなかった。
「…ん？　これは…」
バッグの中に、見知らぬ包みが入っている。こんなの入れたっけな。……あぁ、出がけに渡されたやつか。
包みを破り捨てると、中身は通販で注文した焚き火グリルだ。コンパクトで、とても持ち運びが便利だ。それに、直火禁止のキャンプ場でも焚き火ができたり、炭火により美味しい料理が作れたりする。やったぜ。
欲しいものを買った気持ちよさに浸っていると、がらりと図書室の扉が開いた。あれは…海津友希だ。私を見ず、本棚へと一目散に向かった。少し探したのち、図書委員である私に向けて歩いてくる…途中で、ピタリと止まった。少し目を見開いて、無表情ながら驚いている様子だ。
しばらく止まったのち、手に持った本を急いで本棚に返した。そして、足早に立ち去る。
「わっ…！　あ、ゆ…海津さんっ！」
扉を開けるタイミングが、これからここに来ようとしたなでしこと被ったようだ。なでしこは驚いて尻もちをついている。
「あ…大丈夫…？」

海津友希はなでしこに手を差し伸べる。その手を取ったなでしこはすぐに立ち上がって、ありがとうと答えた。
…ラブコメみたいだな。男女だったら。
海津友希は一度振り返り、私へと少し頭を下げて立ち去った。なんだったんだ…？

「あ、リンちゃん！　やっぱここにいたー！」
「お、おう。…そうだ、はい。これ…」
丁度よかったので、土産のお菓子を渡す。とても喜んだ様子で、想像通りのリアクションだった。…買ってきたかいがあったな。
「あ、そーいえばユキさん、どうして図書室にいたの？」
「ん？　あぁ、そういえば…」
借りようとした本を、なぜか私を見て返していたな。…私に見られたくない本ってなんだ？　まだ仲良くもないのに…秘密もくそも無いような関係だと思うが。
彼女が焦って、本棚へと雑に差し入れた本を引き抜く。えーっとなになに…『みんなで楽しむキャンプ』だな。
「…これを借りようとして、帰ってったよ」
「えーっとなになに？　みんなでたのしむ…」
なでしこはその本を見つめる。そして、はっ！　と何かに気がついたような顔をしてから、私に詰め寄る。
「リンちゃんっ！」
「な、なんだよ」
何かを予感した。これは…なでしこが凄いことを言い出しそうな気がする予感だ。間違いない。
「キャンプしようっ！　今週の土日ひま!?」
……まぁ、いいか。一回ぐらいは付き合ってやろうと思ってはいたからな。でも、もうすぐ期末試験ってわかってるのか。…これは、忘れてる顔だな。
「…焼肉でもするか？」
「やきにくっ!?　良いじゃんっ、焼肉キャンプっ！　キャンプ場は私

が責任を持ってリサーチするよっ！」

すごくウキウキしながら図書室を飛び出した。…ソロキャン以外は初めてだな。変わった楽しみとか、あるのかな。

六話

なでしこのお姉さんの車で、海津さんの家にやってきた。その理由は、3人で焼肉キャンプをすることになったからだ。…なでしこと二人だと思ってたのに、なぜなんだ。別に良いんだけど。

連絡を入れて、車の外で待つ。そして扉が開けば彼女が現れる。

「背、高…」

隣の桜さんがそう呟いたのが聞こえた。そりゃあ妹と同い年の子と聞かされて出てきた子が、そこそこの高身長である自分よりも身長が高ければ驚くだろう。私となでしこが小さいのもあるだろうが。

「…海津友希です。今日はよろしくお願いします…」

「えぇ、よろしくね。ユキちゃん」

もはや同級生だな、こりゃ。

「…志摩さん、だっけ」

「は、はいそうです」

私を静かに見つめる海津さん。同級生なのに、年上にするようについかしこまってしまう。そして、なぜか威圧感を感じる。何を喋るのか、ドキドキしてしまう。

「……今日は、よろしく」

「よ、よろしく…」

何を言うと思ったら、ただの挨拶じゃないか。なんか…やりにくいな。同級生に遠慮はしたくないけど、だからって軽々しい態度はやっぱ取れないしなぁ。

っていうか、なんで海津さんを誘ったんだろうな。…ていうかなでしこ、まだ海津さんが初心者キャンパーってこと知らないんじゃ…

そんな懸念を抱きつつも、全員車に乗り込んで出発した。目的地は、四尾連湖のキャンプ場だ。

……いや、気まず！　隣同士座ってるけど、全然しゃべれねー…何喋ったら良いかもわかんないし…お菓子貪ってないで助けてくれなでしこ…！

「あ、リンちゃん。食材買ってくスーパーってどこ？」
　ありがとうなでしこ、お前は命の恩人だ。
「ぁ、ああ。この先にゼブラっていうスーパーがあるよ」
　こんな僅かな会話でも、少しは繋ぎになるだろう。
　…私となでしこ、席変わった方が良いんじゃないか？　あいつなら海津さんとも話せるだろ。スーパーで降りたら交代してもらおうかな。
「…志摩さんは、野クル、入ってるの」
「え？　いや、違いますけど。…海津さんは入ってるんだっけ」
「…一応ね」
　…ぜんっぜん話が広がらない。なんだこの地獄みたいな空気は。くっそー、私はなでしこみたいにすぐ仲良くなれるようなコミュ強じゃないんだぞ。
「スーパー、あれかなー」
　やっとスーパーが見えてきた。なんか大した距離じゃないのに、めっちゃ長く感じた。

「お肉何買ってく？」
「豚バラ、カルビ、豚トロ、ロース、タン…」
　焼肉キャンプだ、遠慮はいらない。何もかも買って食いつくそう。
「あ、私豚トロ好きー。ゆ…海津さんは？」
「だいたい何でも。…鶏肉とか」
　確かに、アスリートは鶏肉っていうイメージだ。…食事とかこだわったりしてるのかな。だとしたら、雑なキャンプ飯とかって嫌がったりする…のかな。
　そんなことを考えていると、スーパーの肉売り場にやってかた。その一角に、『モリモリ、焼肉コーナー』があったのだが…バラとカルビしかない。
「普通は夏だもんね、バーベキュー…」
　マイノリティー殺し…くっ…。私の焼肉計画が全部崩れた…

と、私が悲しんでいる間に、二人は次から次へと籠へと豚串や焼き鳥を放り込んでいた。…炭焼きだし、そういうのも良いかもな。
海津さんも、こだわりのアスリート飯！　みたいなのじゃ無さそうで良かった。

「……っ！　し、志摩さん…これ…」
「ん…お金？」
なでしこが出来立てのお惣菜に釣られる最中にレジへ向かう私たちだったが、海津さんが私に数千円を渡してそそくさとどこかへ行ってしまった。なんなんだ全く。
「リンちゃーんってあれ、ユキさんは？」
手にメンチカツを入れた袋を持って戻ってきたなでしこ。…いない時はユキさんって呼んでるんだな。
「なんか、どっか逃げてったぞ」
肉の詰まった買い物籠と、預かった千円札をヒラヒラと見せつけて、海津さんの奇行を伝える。二人で不思議に思いながらレジへ向かう。
「いらっしゃいませ～」
ん…？　この顔は見たことがある。確か野クルの…犬山さんだったか。
「志摩さんと二人でキャンプ、楽しんでなー」
「いや、二人じゃむぐっ！」
「うん！　写真いっぱい撮ってくるよー！」
なでしこにいきなり口を抑えられた。なでしこまでもが奇行に走るとは…いや、度々やってるか。
しかし、犬山さんもギョッとした目で見ていたぞ。
「なにするんだよ、全く」
「う、うーんと、ユキさんにお願いされてて…」
「お願い？」
「うん。あきちゃんとあおいちゃんにはキャンプしてるのは秘密にし

て欲しいって」
何でだ。てゆーか、あの二人となんか関係あるのか、海津さん。
「えっと、二人とユキさんは幼馴染なんだけど…」
つまり逃げたのは、犬山さんにキャンプをしてるってことを知られたくなかったから、か…ますます意味がわからないな。だって、前に図書室で開いていた本はグルキャンって感じの本だったじゃないか。
「なぁ、なでしこ。海津さんって二人と仲良いのか？」
「直接話してるところは見たことないけど、きっと仲良しだよ」
…キャンプ場で…色々と聞いてみるか。

「紅葉綺麗だねー」
「うん、丁度見頃みたいだしね」
湖と、綺麗な紅葉を望むキャンプ場。うん…良い場所だ。
「でも、牛のお化けの言い伝えが有名らしいね」
そう言ったら、さっきまでのはしゃぎ様は何処へやら。石化したように固まってしまった。そういえばこいつ、こう言うの嫌いだったな。
「し…志摩さん、その話…本当？」
「うん、丑三つ時になると湖から牛鬼の亡霊が出るとか、出ないとか」
「今夜は出ないでください今夜は出ないでください…」
道にあった何かもわからない石碑に小銭を置いて拝むなでしこ。そして、海津さんもその隣で静かに手を合わせていた。…もしかして、お化け苦手なのか？

なでしこは写真を撮りに、山の中へと消えていったため、私と海津さんがグリルに火をつける。下に着火剤を敷いて、備長炭を縦に積み上

げる。
「ねぇ、海津さん」
「…志摩さん」
話をしようと思ったが、逆に何かを言いたそうにしている。
「…その、別に…ユキで…いい」
恥ずかしそうに、斜め下を向きながらそう言った。…なんか、今までカッコいい人だと思っていたけど、意外と可愛いところあるじゃん。
「…じゃあユキ。…その、さ。野クルの二人と仲良くないの？」
「…別に、悪くない」
「…じゃあ、好きなのか？　あの二人」
「……嫌いじゃない」
バツの悪そうな表情でそう答える。
…なんか、素直じゃないだけじゃないか？
「そっか。　…私は、そう言う時は好きって言ってくれた方が嬉しいけどな」
「……ぅ…」
多分…ユキはクールでもミステリアスでもなんでもない。ただの表情と感情表現に乏しい、内気な女の子だ。
「あっ、ちょっ…！」
ユキは機嫌を損ねたのか、立ち上がって何処かへ歩いていってしまった。
…やっちまった。仲良くもないのに、変なお節介をやいたらそりゃ嫌がられるだろ。何やってんだ私は…
追いかけようと思ったけど、今私が行っても逆効果だろう。…少し時間を置こう。
「…あれ、火消えてる…」
着火剤が足りなかったか。さっきは半分だったが…全部入れてしまえ。

「…全、然、つかん…！」
着火剤を増やしても、燃え尽きても、火がつく気配は微塵も無かった。…やばい、喧嘩もして、火もつかなくて。何もかも上手くいかん…！
「ベテランさん呼んできたよっ！」
「こ、こんにちは」
「…!?」
呆然としながら沈み込んでいた意識が、なでしこの声によって浮上する。そして隣には、見たことのないお兄さんがいた。
炭に火がつかず困り果てていたのだが、成型炭をくれた。それに火をつけてから、上に備長炭をのせるのか。
少し待っていたら火がついて、熱風が顔を襲う。
「じゃあこれで、キャンプ楽しんでね」
ひらひらと手を振りながら、隣のテントへ去っていく。
「できる男…。…男、だな…？」
「必殺火熾し人だねぇ」
自分の言った言葉に、なぜか少し違和感を覚えたのはなぜなのだろうか。なんか同じ感覚を最近味わったような気がした。
「あ、そういえばユキさんは？」
「……ぅ……その、なでしこ…」
私は、さっきの事を話す。
「た、大変だよっ！　私っ、探してくるからっ、リンちゃんは待ってて！」
ぴゅーっとなでしこは走って行った。…頼むな、なでしこ。

ど、どこだろう…ユキさん。結構走ったけど、全然見つかんない…。もう暗くなってきちゃったし……く、暗いっ…!?
「こ…こわ…」

光も木で遮られて、視界も少しおぼつかなくなってきた。
「……ゆ、ユキさーん！」
探すついでに大声を出して、少しでも気を紛らわせようとする。
「ユキさーん…わっ！」
足元に出っぱった木の根っこに気づかず、つまずいて転んでしまった。そのまま地面に向かってダイブしてしまう。
「い、いてて…」
すると、ガサガサっと激しい音が近づいてくる。い、猪っ…？　それとも……牛のお化けっ!?　に、逃げないとっ…
でも、身体がすくんでしまって動かない。誰か助けてっ…
「だ、大丈夫っ…!?」
私の目の前で誰かが立ち止まった。暗くて顔がよく見えないけど…ユキさんだ。
「怪我してない…？」
「……ユキさんっ!!　怖かったよぉぉ…」
安心感から、ユキさんに抱きついてしまう。いい匂いするなぁ…落ち着くよぉ…
「…志摩さんのとこ、戻ろうか」

七話

「…おかえり」
　ユキさんに背負ってもらいながら、リンちゃんの所へと戻ってきた。少しずつお肉を焼き始めていたようで、美味しそうな匂いが鼻へと入る。
「ユキ。その、さっきはごめん」
「別に何も悪いことしてない。…食べよ」
　私を優しく下ろして、皆んなでシートに腰を下ろす。二人の間に何かあったのだろうか。でも、ユキさんは全然気にする様子を見せなかったから、そんな大きなことじゃ無さそうかな？

「あ、私お鍋作るねー」
　土鍋につゆを入れて、白菜、長ネギ、お豆腐、にんじん…そしてメインの鱈を入れて、火をかける。やっぱり、お鍋は簡単に作れて美味しいから良いよねぇ。
「ひゃっ…！」
「うお、大丈夫か？　ちょっと炭減らすか…」
　豚串から滴った油が引火したのか、火柱が上がる。ユキさんが上げた悲鳴は少し可愛かった。

「美味しい～！」
　お鍋は身体の芯からあったまり、寒い冬には最高！　リンちゃんは豚串から串を抜いてご飯に乗っけて食べている。私も真似しようかな～
　隣には、お鍋のスープをするユキさんがいる。相変わらず、あまり表情は変わらない。口に合ったかな…？
「各務原さん。　……すごく、美味しい」

「……うんっ！　いっぱい食べてねっ！」
　良かったぁ…。　熱いものを食べたせいか、ユキさんの頬が少しだけ赤くなっていた。

「そういえばここ、ボートでも荷運びできるらしいよ」
「えっ、本当!?」
「寒いからやだ」
「まだ何も言ってないよ～！」
　リンちゃんを誘う気だったのはバレバレだったようで、先制して断られてしまった。残念だなぁ、ちょっとやってみたかったんだけど。

「…焼き終わったよ」
「おおっ、最後は炭火焼きハンバーグだぁーっ」
　ハンバーグには、鉄板で一直線に焼き目が付いていて食欲をとても掻き立てる。これを食べたらお腹いっぱいかなぁ。
「うっぷ…私、一口でいい…」
「…各務原さんは、そっち」
　二個あるハンバーグを、一個をユキさんとリンちゃんでシェアし、もう一個は私が貰う。
　……うまいっ！　とっても柔らかいお肉から、噛むたびに肉汁が溢れてくるよ！

「…はーっ、食べたぁーっ！」
「ご馳走様でした」
　お夕飯が終わり、寝るまでのまったりタイムだ。リンちゃんはお腹いっぱいのせいか、お顔が少しまんまるくなってしまったように見える。ユキさんは…うん、いつもの綺麗なまんまだ。
「ふぅ…炭も残ってるし、焚き火でもするか」
　グリルの中には、炭が未だにごうごうと燃え上がっている。リンちゃんはトングでそれをつまんで地面に置き、その上に薪をくべた。すぐに火がついて、焚き火の完成だ。

やっぱり焚き火をしている時が、一番キャンプをしていると実感できる。

「ユキさん、キャンプ…楽しいね」

「……うん」

少しだけ微笑んでくれた。

「ねぇユキさん。…あおいちゃん達と、キャンプしないの？」

私の質問に、ビクッと体を跳ねさせた。そして三角座りの姿勢で、顔を太ももに埋めた。しばらく無言が続いて、ようやく顔を上げたユキさんは、少し涙ぐんでいた。

「…私……わかんなくて」

「よっ、ユキ」

ある放課中、数少ない友人である千明が私の元へ訪れた。小学校から現在、高校まで一緒である。

「あたしな、部活を立ち上げようと思うんだよ。野外活動部っていうんだけどなー？」

まだ入学したてだというのに、凄まじい行動力。内気な私を、小さい時からずっと、手を引いてくれていた。

野外活動部…。中学の時にも、キャンプをしたいというような事を言っていた気がするから、恐らくそういう事だろう。

「ユキは部活…は陸上部だよなぁ～」

小学校四年生の時から身長が伸び始めた私は、その高身長が活かせるからと千明の勧めで陸上部に入った。そして中学でも続け、その時は全国に出るぐらいの実力だった。成り行きで始めてしまったけど楽しかったし、本気でやっていた。

でも、本気でやればやるほど時間は取れなくなった。千明と話す機

会も無くなって行った。もっとも孤独を感じていたのは私だけだろう。千明には他にも友達がいる。私とは違うのだから。
「あ、やべ。またな！」
授業の始まりを告げる鐘の音がなり、急いで戻る千明。
「……誘ってれても、良いのに」
いちいち面倒臭い私は、自分から何かを発言することはできなかった。

『名前だけ貸してくれ！　頼むっ！』
千明から、ある夜に連絡が飛んできた。野クルを部活に昇格させたいから、部員を増やしたいそうだ。
『ほとんど行けない』
こちらの部活も、そろそろ一年生が大会に出れるようになってくる時期だ。手は抜きたくなかったから、とても野クルに顔を出す時間はない。
『別に来なくても良いんだよ。在籍するだけで良いから、どうだ？』
それは別に私じゃ無くても良い。その辺の人を捕まえれば良い。一度そう考えると、少し辛くなった。
私が忙しいのを知っているから、付き合わなくても良いと言ってくれている。でも、来てくれと言って欲しい。
「…私…最悪」
千明の心遣いだというのに、それを不満に思い不機嫌になっている。……あぁ私、何がしたいんだろ。
『好きにすれば良い』
顔出せる日は出すよ、みたいな気の利いた事は言えない。私はそんなに、器用でも、素直でも…ない。

そこから数ヶ月、千明やあおいとは殆ど喋らなかった。気づけばも

う十月、こんなに時間が経っていたのかと驚いた。
陸上の大会は冬には姿を消す。もちろん来年に向けて練習を詰め込む時期であるが…夏に比べ時間は圧倒的に余っている。
初めて、野クルに顔を出しに行こうとした。荷物を背負って、部室棟の中の一室の前へやってきた。中からは千明とあおいの声が聞こえる。ノブをつかもうとした。
「……」
久しぶりで、どんな顔をして会えばいいのか、何を話したらいいのか、そう考え始めたら怖くなった。そのまま、踵を返して立ち去った。
二人が酷いことなんて言うわけがない。私を受け入れてくれる筈だ。でも、二人の優しさに甘えているみたいで、嫌だった。

「……きつ」
自宅で見つけたテントを持って、キャンプ場にやってきた。
どうにか張ろうと四苦八苦するも、とても完成する気配が見えない。
このテントは、確か小学生の時に一度だけ家族でキャンプした時のものだ。暑さがしんどくて、その一回以後もう我が家でやることはなかった。
…ファミリー向けだから、一人で立てるのは想定されてないのは当たり前なのだが、なんで気づかなかったんだろう。
ネットで調べて、必要なものは揃えたと思ったのに。一番大事な寝床が作れなければ全部ガラクタ同然だ。
「あの…て、手伝いましょうか…？」
頭を抱えていると、後ろから声をかけられた。振り向くと、ここに来た時に目にした、私より一回り…いや、2回りほど小さい子がいた。中学生ぐらいだろうか。
「……助かります」
せっかくなので、甘えることにした。二人でもやはり苦労したが、

なんとかテントを張ることに成功した。
そのまま別れたが、家族が近くにいるようには見えない。小さいのに、逞しいな。
とりあえず、ネットで調べながら焚き火というものを実践してみる。着火剤を置いて、その上に細い枝をおく。マッチで着火剤に火をつけると、次第に細い枝にも火が移る。ここで、拾ってきた大きい薪を乗っければいいのかな。
火は大きくなっていき、熱がじんわりと体に伝わってくる。テント立てでは頓挫しかけたが、こっちは上手くいってよかった。
「……」
暇だ。話し相手もいないし、暇つぶしグッズも何もない。しかし、わざわざキャンプ場にまで来て携帯を弄る気にもならなかった。このまま、しばらくぼんやりしていよう。

尿意を催したため、トイレへやってきた。山奥のトイレだけど、意外と綺麗で、衛生的な感じがする。前に家族で旅行した山奥は、薄暗いし臭いし汚いし有料だし…愚痴はここまでにしておこう。
「……ひっぐ…うぅぅ…」
「…!?」
暗がりから、啜り泣くような声が耳に入る。…嘘でしょ、ちょっと洒落にならない。こういうのは本当に嫌いだ。…でも、トイレには行きたい。
「……？」
声がする方をこっそりと覗き見る。……女の子か。お化けとかじゃないよね…
「…た、たすげ……ひっ…！　……た、食べないでくださいぃ…」
私を見て助けを求めたかと思えば、直ぐに怯えた表情に移り変わった。私…そんなに顔怖いかな…
「…食べたり、しないけど……えっと…」
ど…どうすれば良いのだろうか。私には手に負えない…助けて…

「…あの、どうかしました？」
さっきの先輩キャンパーが背後に、若干の疑いの目を向けて立っていた。…側から見たら、私がこの子をいじめているように見えるかもしれない。
「たすけてくださいいいっ……！」
「……え、ええ…？」
２人はテントへ向けて去っていった。……なんか、誤解されてないと良いけど。
……う、そういえばトイレ済ませてなかった。

ユキはぽつぽつと、隠していた胸の内を私たちに漏らし始めた。
「……どうして、こうなっちゃたんだろう」
野クルの２人との距離を感じて、付き合いが上手く行かなくなった事を、とても気にしていた。
……やっぱ、普通の女の子だな。ちょっと内気で、恥ずかしがり屋で、素直になれないだけの可愛い女の子だ。
「…誘いもたくさん断った。もう何ヶ月も喋ってない。…もう…怖くて」
薄らと涙を浮かべながら語る。…少し気にしすぎな気もするけどな。友情なんてモノはそう簡単に切れるモノじゃない。だが、ユキはそれを恐れてる。嫌われていたらどうしよう、自分のことなんてどうでもよく思っているのではないかと。
「……ユキさんは、２人のことが大好きなんだね」
「……別に、そんなんじゃ…」
目を逸らしたユキへ、なでしこは距離を詰めて手を握った。
「ううん、絶対にそう。だってユキさん、そんなに悩んでるんだもん！」

…そう、だよな。
「…仲直りしたいから、そうやって悩んでるんだろ。私はあの2人のこと知らないけどさ…友達、なんだろ？」
…なでしこがユキを誘った理由がわかった気がする。何も考えてなさそうだけど、優しい奴だからな。
「ユキさん、一緒に頑張ろう？　あきちゃんもあおいちゃんも、ずーっと待ってるんだよ！」
「…待ってる？」
「うん、野クルの部室で、ユキさんのことをずーっと待ってるよ」
「…私も手伝うからさ」
私よりも遥かに大きい筈のユキの体は、今だけは凄く小さく見えた。この弱々しいコミュ障ガールを助けてやりたいと思うのは、…なんだろう、母性みたいなモノだろうか。

「…先に寝る」
「うん、おやすみユキさん」
「おやすみー」
一足早く眠りに着いたユキ。なでしこのテントへと入っていき、静かになった。しかしなかなか寝るのが早いな。まだ9時だというのに。
「なんかさ、ユキって…イメージと違ったな」
「そうだね～。こう…くーるびゅーてぃー！　みたいな感じだと思ってたよー」
前髪をサッと払い、キリッとした目つきで格好つけたような仕草をするなでしこ。確かにユキがやったら似合いそうだが、なでしこじゃとても絵にならない。
「まぁ、私が初めて会ったときは意外とオロオロしてたぞ。テント建てれない～って」
「…きっとユキさん、キャンプの練習してたんじゃないかな。あおい

ちゃん達と話題とか合わせるために」
「あぁ、なるほど」
　疎遠になってしまった空白の期間を埋めるべく、なんとか追いつこうとユキなりに頑張ってたのかもな。…私がいなかったら結構ヤバいことになってただろうけど。
「ふぁぁ……もうこんな時間か。…寝るか、おやすみなでしこ」
「ふ、２人で寝ない!?」
「やだ、それに出ないってお化けなんか」